

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

「ありがとう」と言われる
指導の仕方

指導後は、子どもが素直に受け入れてくれたか、それとも反抗的になって心が離れてしまうのか気になります。心が揺れている時に、「先生、ありがとう」と言われたらホッとします。

今回のテーマは、「『ありがとう』と言われる指導の仕方」です。

1 窓ガラスが割れた。その時あなたは？

子どもが窓ガラスを割ってしまいました。近くにいた友達が知らせに飛んできます。知らせを受けて現場に駆けつけます。

Q1 開口一番、何と言いますか。

- ① 割ったのは誰だ！
- ② 何枚割れた？
- ③ 大丈夫？ 怪我はない？

「①」の「誰だ！」の後は、「何で割ったんだ」と続き、しばらくは説教です。起こったことを四の五の言ってもガラスは元通りにはなりません。「覆水盆に返らず」です。

詰問されている子どもは、自分に非があることを承知していますが、くどくどと説教をされると素直になれません。ふて腐れた態度に教師の怒りは増し、説教は更に続きます。教師と子どもの心の距離は説教の長さ按比例します。

「②」は「子どもよりも物が大事」という合理的な態度や教師の自己保身が伺えます。

窓ガラスを割った子どもは、「叱られなかった。先生の関心は窓ガラスが割れたことだけだ」とその時は安堵するでしょうが、時間が経つと

自分よりも窓ガラスを重視した先生の態度に不信感を抱きます。

教師なら何を差し置いても「③」です。

窓ガラスを割った子どもは、先生の「大丈夫？」の一言で動揺していた気持ちが落ち着き、冷静さを取り戻せます。また、周りにいた子どもにも怪我がないか確認することで、その場の雰囲気は緊迫から安堵に変えます。

すると現実、今やるべきことが見えてきます。それは、安全の確保です。

2 割れたガラスの処理はどうする？

早速、ガラスの破片の処理に取り掛かります。

Q2 どうやって処理しますか。

- ① 教師が一人で全部片付ける。
- ② 割った子どもと一緒に片付ける。
- ③ そばにいる子どもたちと一緒に片付ける。
- ④ 片付け方の見本を見せて、割った子どもに片付けさせる。

「①」は子どもが怪我をせず、速やかに片付けが終わります。安全で完璧な処理だけならこの方法が確実ですが、子どもは何を学ぶでしょうか。

失敗は挽回するものです。原因を振り返り、適切な片付け方を考えます。最後は、謝罪の仕方を学びます。失敗することで社会性を学ぶのです。教師が一人で片付けるとその機会を奪い、子どもは何も学びません。

「②」「③」は師弟同行で微笑ましい光景です。

割った子どもの心の荷は軽くなり、周りにいる子どもも先生の存在を意識するので子どもの失敗を咎めません。みんなで友達の失敗をカバーすることでクラスの雰囲気は良くなります。

しかし、一緒に片付けると子どもから目が離れ、教師が予想もしない片付け方で子どもが怪我をすることもあります。子どもの安全を保障するためにも、一緒に片付けをせず、いつも子どもを見られるポジションを心がけます。

そして、窓ガラスを割った子どもには深く反省してほしいものです。自分の失敗は自分で償うことで成長します。そういう意味では「④」がお勧めです。

まずは、窓ガラスを割った子どもに「箒・塵取り・ガムテープ」を持ってこさせます。一度に3つも指示したら覚えられないと思うでしょうが、複数だからいいのです。準備しながら、それぞれの使い方と効率的な片付け方を考え、やることの優先順位を決めようとしています。失敗から生活の知恵を獲得することができます。

子どもが持ってきた道具で先生が片付けを始めます。その時、「まず、大きな破片から片付ける。次に、小さな破片を箒で集める。取り残した破片をガムテープで取る」と口にしながら片付けの見本を見せて、子どもにも復唱させます。口に出すことで耳から情報が入り、強く記憶されます。また、当事者意識が高まり、主体的に取り組もうとします。

危険性の無い片付けは子どもに任せ、傍で見守ります。上手にできたら、「そうだね。綺麗になったね」と手際の良さをほめます。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

3 責任の取り方はどうする？

割れた窓ガラスの片付けは終わりました。しかし、まだ管理職（教頭先生）への報告が残っています。

Q3

どのように報告しますか。

- ① 割った子どもだけで報告する。
- ② 先生が報告する。
- ③ 割った子どもと先生の二人で報告する。

ガラスを割ったのは子どもですから、「①」のように子どもが報告に行くのは当然です。

職員室という慣れない場所、教頭先生という「偉い人」からの指導を神妙に聞きます。教頭先生はガラスを割った理由を聞き、再び過ちを繰り返さないように指導してくれるでしょう。

しかし、一人で教頭先生と対峙している子どもの心中は不安でいっぱいになり、謝ることも、それから解放されることで頭がいっぱいになります。

「②」は優しく良い先生です。子どもは謝らなくて済んだので気が楽になり、子どもとの関係も良好になるでしょう。

しかし、「先生」としては不十分な対応です。「困ったときは先生がなんとかしてくれる」という他力本願な子どもではなく、責任を自覚できる子どもに育てて欲しいものです。

私なら「③」の「二人」で報告します。ただし、自分の失敗を自分で解決させるために、報告は窓ガラスを割った子どもにさせます。先生

がその傍にいたことが大事なのです。子どもにとつて、職員室で教頭先生に謝ることはかなりの重圧です。そんな時に、先生が隣にしていると安心できます。

職員室に行く前に、謝罪の仕方を教えます。

- ① 失敗↓窓ガラスを割ってしまった。
- ② 原因↓窓の方にボールを蹴ってしまった。
- ③ 対処↓割れたガラスは処理した。
- ④ 今後の対応・反省を生かす
↓窓に向かって蹴らない。
- ⑤ 謝罪↓窓ガラスを割って、すみませんでした。

これら5つの台詞を二項目ずつ先生の後に続いて復唱させ、子どもが覚えるまで練習します。そして、「一人で言うてごらん」と促します。子どもが淀みなく言えるようになったら、先生が教頭先生役を演じて「予行練習」です。こうすることで職員室で教頭先生を前にしても、臆することなく反省の言葉を言えます。

いよいよ職員室に行きます。教頭先生には事前に窓ガラスを割ったこと、子どもの口から謝罪させることを伝えて、口ごもることがあったら言葉を足してもらおうように頼んでおきます。



「窓ガラスを割ったことで〇〇さんから教頭先生にお話があるそうです」と口火を切ります。謝罪が終わり、職員室を後にします。並んで歩きながら、声をかけます。

「窓ガラスを割ったことは失敗だけど、後片付けや教頭先生に謝ったことは立派だったよ。自分の失敗は自分で償うことが大事だよね」

窓ガラスを割ってしまったのですから、叱られても当然です。それが、一言も叱責されないどころか、「立派」とほめられ、子どもは戸惑います。すると、「先生、ありがとう」と思いがけない言葉を発します。「何で『ありがとう』なの？」と優しく聞くと、学んだ事を話してくれます。

聞き終わった先生は、「子どもに失敗はつきもの。失敗を反省し、同じ過ちを繰り返さないことが大人になるということだよ」と肩をポンと叩きます。

教師が何でも後始末や謝罪をすると、子どもは責任の取り方を学べません。教師の後ろ姿を見せて自立させるといふ考えもあるでしょうが、教師がしてしまうと、子どもは自分の失敗を他人事として捉えます。自分の失敗は自分で対処することで教訓となります。

子どもとの関係を損ねるのは感情的に叱った時です。感情で叱ると感情が反応します。気持ちが伝わらない、誤解されるのはそのためです。感情ではなく、理屈で冷静に指導すると子どもは納得します。そして、自分の失敗に気づき、正しい事後処理を知り、先生に感謝します。